
市ちゃん

ぼーず平野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

市ちゃん

【Nコード】

N1471R

【作者名】

ぼーず平野

【あらすじ】

乱暴者市ちゃんをめぐる話。夏目漱石風にまとめてみました。

市ちゃんは乱暴者で困るというようなことを妻が云う。将来が案じられると云う。それがほんとうかどうかは判らない。ただ裏の路地でいつも誰かが泣いている。そうして、泣いている子供のそばには、かならず市ちゃんが立っている。

市ちゃんは路地裏の長屋に住む大工の倅（せがれ）である。大工の金造さんは腕は確かだが、酒を過ぎして三年前に親方から破門された。二年前にはかみさんが愛想をつかして出ていった。かみさんが出ていった日に長屋の者が様子を見にいくと、金造さんはまだ四十だというのに、すっかり皺だらけになった手をさすりながらぼんやりと畳の面ばかり見ていたと云う。

かみさんに逃げられてからも、金造さんはたまにこぼれ仕事へありついたかと思うと、あいかわらず四十銭の手間賃のほとんどを酒に換えていた。だから日掛け三銭の店賃（たなちん）を払うと、月末にはもう何も残らなかった。女手がないから着物を洗うことも張ることも滅多にない。そういう訳で、市ちゃんの着物はまるで醤油で煮染めたような、元の紺紺の正体が判らないほどの色になっている。おまけに四六時中、涙（はな）を拭くから筒袖が黒光りしている。

市ちゃんは学校に通わない。もう通ってもいい年頃であるが、金造さんにとっては学校なんかどこ吹く風である。二十銭の月謝を払うくらいなら酒が一升飲める。だから市ちゃんは、同じ年頃の連中が袴を着けて唱歌なんぞを唄いながら通う学校の何者たるかを、まったく知らない。では親爺の見習いでもしているかと云うとそんなこともない。年季奉公はというと、一度ある人の周旋で提灯屋に奉公にあがったものの、ほおずき提灯に頸（くび）を入れて豆腐屋の娘を追いかけまわしたと云うので、二日で帰された。そんな訳でただ毎日朝早くから日の暮れるまで、年中同じ筒袖を着たまま下駄も

履かずにそこいらを駆け回って遊んでいる。

私の住んでいる家の裏に、七尺ほどの高さの大きな板塀が立っている。この板塀は市ちゃんの住む西隣の九尺二間の棟割長屋と、吾が家を隔てる役目をもっている。もつとも裏の長屋がいくら狭いといったところで、こちらでも威張れるほどの家ではない。猫の額ほどな庭を含めて僅僅六十坪である。

狭苦しい家に引きこもっていると、風通しの悪い夏の日などは、どうかするとこの板塀を恨めしく思うことがある。この家に引き越してくるとき、妻がなんだってあんな大きな塀を立てておくんでしよう。と家主に訊いた。すると家主は、これだけ高いと西日が当らないから具合がいいでしょう、それにこの板はたしかに檜です、しかも上等です、今どき板塀にこんな檜を使っている家はありません。と、この塀のことをたいへん褒めた。そしてすぐ後で小声になって、実はこの塀から向こうはそのちよつとアレですから、それで家賃もかようにお安くできるのでしてと、引き攀れたように笑った。

それでも住んでいるとだんだん慣れてきた。家主によると水道が通じているのはこの家までで、裏の長屋から向こうはまだ共同井戸らしい。裏の様子は判らないが、昼夜の別なく高い板塀を越えてぎあざあと井戸を使う音がする。戸を開け締めする音やト口函か何かを放り出すような音がする。瀬戸物がぶつかる音がする。柏手を打つ。人が笑う。怒鳴る。なかでも市ちゃんの声はよく判る。鴉の仔が巢のなかで親に餌をねだるような、歳にも似ず大人びて厭らしい響きをもっている。そのたびごとに妻が、「あれが市ちゃんの声ですわ」と云う。云わなくてもいいものをわざわざ云っておいて、顔をしかめて目だけをきよろきよらせている。なるほど不快に違いない。

「市ちゃんに限っては、騾（しつけ）も道理もありゃしない」

七月も大暑に近いある夜、妻は暗い洋灯のしたで汗じみた襟をかけかえながら、市ちゃんをたいへん攻撃した。

「そうかね」

「筋向いの栄さんの娘さんが、縁日で買ってもらった芋飴を舐めていたら、髪を引っばって泣かせておいて取りあげるんですよ」

「その話は以前にも聞いたよ」
すると妻は顔をあげて、

「それだけじゃありません。お隣の子も下駄を川へ流されたと云って、ご主人が談判に行かれたそうです。ほかにもいっぱいあります。このあいだなど、うちの千代が表に広げていた雷干（かみなりぼし）を、みんなちぎって筵（むしろ）のそとに放り投げてあるんですって。この近所でそういうことをするのはあの子しかないから、きつとそうでしょうとたいへん憤慨していましたわ。どうしてそういうことをするんでしょう」と、息も継がずに立て続けにしゃべった。
「さあな」

私は巻莖の青い煙をぼんやりと眺めながら、簡単に返事をした。

「あんまり乱暴だから、ここいら表通りの家の子は、みんな八分にしているんです。でもあのおはつさんが来てからは、吾が子でもない後妻の身分で、方々謝ってまわるんでしょう。かえって気の毒なような、ほんの少々ですけれど妙な心持ちがしますわ」

「ふむ、そうかい」

私はやはり簡単に答えて澄ましていた。すると妻は針の手を止めずにちよつと目だけをあげて、「あなた、おはつさんを御存じですか」と訊いた。仕方がないから私は「誰だい、おはつさんてのは」と訊き返した。

「つい先日、金造さんが後妻をもらったんですよ。大柄で、丸太ん棒のような腕をしてるんです。でも明るいい人ですわ、よく通る大きな声で。三味線を弾くんですの、いま流行りのなんとか云う節ですわ。ええと、なんとか云いましたっけ」と妻は取りとめもないことをしゃべった。

「そりゃ知らなかったな」

私は莖の火を消して書斎に入るために立ちかかった。

妻は、半襟をかけ終わった襦袢に衣文掛けを通しながら、

「でも無学ですからね。見かけ行儀があっても人間はどうだか」と云ってちよつと溜息をついた。

「どうして」

「どうしてでも無学でしょう」

「そうかね」

「そうですよ。このあたりじゃ、裏店はちよいと鼻抓みですから」

「そんなものかな」

妻は私の返事に愛想が尽きたらしくもあり、私は書齋へ入って話はそれきりになった。

二

庭の柿木に蝉が来てうるさく啼くようになったある日、昼飯を食っている、裏の長屋で慌しく駆けだす下駄の音と大きな声がする。また裏で何か始まったと思うと、市ちゃんと誰かが諍（いさか）いをしているらしい。市ちゃんはいつも裸足だから、下駄を履いているのは別の誰かである。

「おまえの父つつあん、願人坊主、ちよぼくれちよぼくれ、やあいやあい」と囃したてるのは市ちゃんの声である。どこでそんなことを覚えてきたのか、節と拍子をつけて、鴉の仔が啼くような嗶れ声でからかっている。「そろそろ乞食坊主、門付けやろうか」とも云っている。

一方のからかわれた相手は、市ちゃんの挑発に憤慨している様子である。早口でどうも何だか判らないことを云っていたが、「何だ、この野郎。石を投げるぞ」というところだけははっきりと聞こえた。声の様子からすると、おそらく市ちゃんと同じ年頃の男児であろう。「投げるなら投げてみる」

市ちゃんの声が決然として聞こえる。子供のくせに妙に大人びていて、声変わりしかかったような嫌な音色である。

「ほんとうに投げるぞ」

相手の子供は、今度は市ちゃんに負けなくらい大きな声でそう云った。

「なんだ、ちよぼくれの分際で」

どうも二人が睨み合っているらしい気配がする。その後から聞こえるのは蝉のニイニイ啼く声ばかりで、まるで真昼の決闘である。どんな石を持っているのか判然しないが、あまり上等な遊びではない。

私はついに下駄を履いて庭に降りて行って、堀越しに声をかけた。柿の木に止まって暢気に啼いていた蝉が、驚いて飛び去った。

「おいおい、喧嘩をしちゃいかん。仲良く遊びなさい」

塀の向こうはしんと静まりかえっている。まるで誰もいない方角に向かつて、私ひとりで相撲を取っているようで、ちょっと狐につままれたような気がする。夏の昼下がりは茹（う）だる。日向にただじっと立っているだけでさえ、汗が流れて不快である。

「おい、聞いているのか。仲良く遊びなさい。さもないと巡査を呼ぶが、いいかね」

私は少し大きな声でそう云ってみた。

するとぽたりと石を地面に放り出す音がして、「そら見ろ、怒られたろう。今日のところは許してやる」と云うが早いか、砂利を踏んで駆けだす下駄の音がする。

残されたのは市ちゃんである。彼は逃げていく男児に向かつて、「やあい、願人坊主くそ坊主。逃げるのか弱虫」とさらに追撃をあびせた。私が当事者なら、頬べたの一つや二つ張ってから逃げたに違いない。それほど生意気で癪に障る云い方である。塀の向こうではあるが、市ちゃんが下唇を思い切り突きだして喚いている様子が想像できる。

「あんまり変なことを云って煽るんじゃないよ」と私は塀の向こうの市ちゃんを嗜（たしな）めた。市ちゃんはこっちを向いて「要らぬお世話だ、くそじじい」と一声吠ええると、自分の家に入ってこの暑いのに板戸をぴしゃりと閉めてしまった。

「いけ好かないったらありゃしない」

私が茶の間に戻ると、そう云って妻が顔をしかめた。

「まあ、子供の云うことじゃないか」

私は平気な顔で云って、途中になっていた残りの飯を食った。

「いちいち癪に障るんですよ、あの子は。自分の父親だって酔漢（のんだくれ）の碌でなしのくせに、願人坊主だなんて、他人のことを云えたものですか。ほんとうに無礼な子だわ。なんてお行儀を知らないのでしょうか。いったい金造さんがいけませんよ、ちゃんと学校へ行かせないんだから」

「そう角張ってみても始まらないさ。およし、およし」

「でもあなた。おはつさんも、もう少し何とかできそうなものですけど」

「何とかとは、どういうことだね」

「たった何十銭の飲み代（しろ）が惜しくて学校にやらないんですよ。おはつさんがもっと遣り繰りしなくっちゃいけませんよ。しつかり者だと思っていたのに、案外だわ」

「おはつさんがいくら頑張ってみても、元来稼ぎは金造さんなんだから仕方ない」

「そんなものでしょうか」

「そんなものさ。それに飲み代が惜しいかどうか、本人がたしかにそう云った訳ではないからね。隣近所でもっばらそういう風評が立っているばかりだ。風評を勝手に諒解している分にはなんともないが、だからと云ってそれを武器に責められたんじゃ、金造さんも気の毒だろう」

「あなた、たいへん金造さんを擁護するんですね。やはり殿方同士ということなんでしょうか」

「馬鹿云っちゃいけない。人物を評論するなら正確な裏付けによつてするのさ。君みたように、根も葉もどうだか判然しないような噂を是としておいて、金造さんはこうだと決めつけているのでは、まったくもって平等ではないね」

妻は浮かぬ顔をして黙り込んだ。庭の柿の木に、またいつの間にか蝉がやってきてうるさく啼き始めた。

三

その日の夕暮れ、玄関でちよつと頼みますと云う女の声がする。

ちよつと妻も下女の千代も留守であつたから、仕方なく表に出てみると、丸髻に結つて濃い眉（まみえ）をお多福のような八に描（か）いた、いたつて大柄な女が立っている。真夏だというのにご苦労千萬にも、鯉縞の唐棧織（とうざんおり）に八反と黒繻子（くろじゅす）の腹合わせの帯を結んだ、素性の知れた服装（なり）をしている。よほど活計（たつき）に迫られていると見えて、年中をこの一手で押し通そうというつもりらしい。

女は私の顔を見ると丁寧（ていねい）に頭を下げて、「裏におります大工の家内（うち）でございます」と云う。どうもこれが噂のおはつさんのようである。

「なんですか聞いてみますと、うちの愚息が先生様にたいへんご無礼なことを申し上げたとか。どうかこのとおり、ご勘弁を願ひとう存じます」

おはつさんはそう云つてもう一度頭を下げる。なるほど妻が云つたとおり、彼女は継子（ままこ）の市ちゃんの尻を拭つて歩くようだ。

「なに、そんなことはいっこう平気ですがね」と私は軽く返答した。「本来なら宿が出まして先生様にご挨拶を申し上げるのですが」

「それには及びませんな」

「恐れ入ります」

おはつさんは地の黒い肌に無理に白粉（おしろい）を塗りたくつたところへ、この暑さで汗が流れるものだから、頸筋からうなじにかけて斑（むら）ができていて、まるで風呂上がりの子供が天瓜粉をつけたときのようになっている。

「あなたも暑いのにこうやっていちいち謝って歩いていちゃ、からだに毒でしょう。こちらに被害でもあるなら知らず、そうでないな

ら私のことなんざ、どうでもよろしい。そんなことより、ちと教育なさい。あなたが頭を下げて回るよりは、その原因が取り除かれることのほうが、ずいぶんいいでしょう。何だってああいふ具合に、愚なことを云ったり乱暴したりするのを放っておくんです」

私にはそんなふうにおはつさんを責めるつもりはなかったが、喋っているうちに計算が違って、妙に気の立ったことを云った。

するとおはつさんは八の字の眉尻を一層下げて、大きな背を窮屈そうに丸めた。

「ご存じかどうか、私は金造の後妻でございます。市造は宿の先妻の子でして、どうも勝手が判りませんゆえ宿の云うなりに奔放にしております」

「ちと奔放が過ぎちまったようですな」

「まったく仰せのとおりな訳でして、私がこうやって頭を下げて歩くでございます」

「なに私のほうは気になさらんでよろしい」

「はあ、そりゃ先生様にもご無礼を働いたには違いありませんのですが、もっと別な方面にもいろいろ心配がありまして」

おはつさんはそう云って手ぬぐいで汗を拭く。鼻の頭は白粉がおおかた流れてしまつて、茶番劇の酔っぱらいのようにそこだけが赤くなっている。

「何か大きなことをやらかしましたか」

「ええ、それが……」

おはつさんはちよつと云い淀んで、弛んだ鬚の根に手をやった。

四

「実は一昨日も、池之端あたりから来る虫売りが路端に荷を置いて、ちよいと近所に憚りを借りているあいだに、籠をみんなあけて中の鈴虫を逃がしちまうんです」

「なるほどやりましたな」

「虫売りが血相を変えて怒鳴り込みまして」

「そりゃそうでしょう」

「二円で示談にしてやると云ってくるんです」

「ちと高いようすな」

「はあ、しかし二円を払うまでどうしても許さないと、たいへん激しい剣幕でして。仕方ありませんから私の着物を質に入れて都合しました。それが先生、てっぺんから湯気をあげて怒っている虫売りの、頭のちょうど禿げたところに、逃げ遅れた鈴虫が一匹、しばらく涼しげに止まっておりましてね。私やおかしくて虫売りの罵声なんか聞いちゃいませんでした」

「それでお仕舞いですか」

「まだあるんです。三日前は座って莚を吹かしてる飴売りの目を盗んで、芋飴をちよいと失敬しました」

「価（あたい）はいくらでした」

「このときは一錢五厘でした」

「飴売りもさぞ怒って来たんでしょうな」

「いえ、家に帰ったらお足はあるんだと云って勝手に引っ張ってくるんでございますもの、そりゃ飴売りは商売ですからにこにこしてました」

「ふむ」

「まだあるんです」

「まだありますか、そいつは驚きですな」

「ええ、数えあげると切りがないほどあります」

「もう大抵でいいでしょう。それよりも、そんな不埒をしていると、そのうち巡査に捕まりますがなあ」

「それが先生、もう捕まっちゃったんでございます」

「捕まったって、そりゃどういう訳です」

「これがまた本当にお恥ずかしいことで」

「なにも無理に訊こうという腹はないので、べつに云わんでもよろしいのです」

「よろしければ相談に乗って頂きたいので」

「相談ですか」

「はあ」

「どんな相談です。場合によっちゃ」

「ですから今それをお話ししようと」

「私はあいにく金には縁の薄い方ですが」

「そうですか」

おはつさんは額に汗を浮かせたまま俯く。ずいぶんと落胆の体である。

「やはり金でしたか」

「ええ、まあ」

「残念ですな」

「はい、申し訳ないことでございます」

「でもまあ、云うだけ云ってみなさい。何か妙案が出るかもしれないので」

五

「それが、米屋に泥棒に入りましたんでして、そこを巡査に捕まっ
たんです」

おはつさんは大変言いにくそうに鬢のほつれをしきりに撫でる。

「泥棒にですか」

大抵のことには驚かないつもりでいたが、さすがに恐れ入る。

「ええ、昨日のことでございます。米屋に忍びこんで、蔵から出して積んであった俵を小刀で切って、入るだけのお米を袂へ入れるんでございまして。すぐに小僧どんに見つかりまして、逃げ出したところをちょうど歩いてきた巡査につらまったのです」

昨夜巡査に捕まって今日あの喧嘩のていたらくでは、先が思いやられる。

「ぜんたい米なんか盗んでどうしようってんです。腹が減るなら、ちと金造さんに改めてもらっちゃどうです。仕事もせずに酒ばかりじゃあ、いかんですな」

「へえ、さようで。近頃は以前より出るんでございますが、なにしろあんなふうでお酒を飲まなければ手元が狂うと申しまして、朝から茶碗で引っかけますので、私なぞは見つけるたびに小言を云うのですがどうも聞きません」

おはつさんは茶碗で引かけると云うところで、実際に左手の指で輪をつくって引っかけける真似を試みせた。私はそれをちよっとおもしろいと思った。

「それは金造さんに自覚が足りませんな。親というものは自分がひもじくしても、子供には存分に食わせるものです」

「それがその、私が女だてらにときどき辻へ出て売卜（ばいぼく）をしますんで、いくらかにはなるのです。ですから先生、市には三度のものを食べさせておりますのにお米を袂なんぞに入れて、私にはどうという了見でそんなことをするんだか、どうも不思議でなりま

せんのです」

おはつさんはほんとうに不思議でならぬふうに頸をひねってみせた。

「それは不思議ですなあ」

私もつい言葉を繰り返して同調するよりほかに、格別の知恵も浮かばなかった。私は玄関でおはつさんに向かい合ったまま、袂からちよっと巻蓑を出して一服つけた。そうして輪に吹いたり横に吹いたりして黙っていた。

「それで先生、お足のことですが」

おはつさんはしばらくぼんやりとしていたが、私の煙に呆れたとみえて口を開いた。

「はあ、そうでしたな」

「米屋の番頭さんが家へ来まして、巡査と相談したがまだ小さい子のしたことゆえ、損の生じた分を払えば事を大袈裟にしないでやると云いまして、私はどうしても月末までに七円二十銭をつくらないといけなくなったのでございます」

「袂一杯の米に七円二十銭ですかい、そりゃ高い」

「それが俵を刃物で切ったので、全部が地面にこぼれてしまつて価値がまるでなくなったのだとか。ですから米一俵分の価を弁償しろと云ってきたんです」

「しかし相手は子供なんだから、少しは手加減しても良さそうなのだが」

「そう思います云ってみてもはじまらないので、米屋の番頭さんには判りましたと答えるしかありませんでした」

とここへきて、おはつさんは八の寄った眉を上げたり下げたりしながら、ついに一片の涙を見せた。

六

その夜は床に入ってから蒸し暑く目がさえた。私は蚊帳の中でしきりと寝返りを打った。そうしてたびたび起きては台所で麦湯を飲んだり、憚りへ行ったりした。そのたびに隣で寝ている妻が迷惑そうにこっちを見る様子が、気配で判った。

布団のうえから見える狭い庭は闐然として鳥獣の影なく、草木の枝葉もそよもしなかった。軒に吊してあるはずの風鈴もちりとも鳴らない。斜に差し込んだ更待月（ふけまちづき）の光が、海苔を貼りつけたような柿の葉を通して青白くここまで漏れてくる。すべてが深夜の静寂のなかに落ち着いた調和を保っている。ただ私の頭のなかだけが妙な具合にささくれ立っているのである。

おはつさんは純粹誠実に恐縮するのか、あるいは金が要るので恐縮するのか、その腹は到底読み取れない。ただ先妻の子の尻を拭いて回らざるを得ないことを、別段理不尽と考えている節もない。

市ちゃんはまだ親の苦労も近隣の迷惑も分別しない腕白坊主である。今日盗んだものを明日に活用する知恵がありそうにも見えない。無邪氣が勝っているうちは結構だが、そういつまでも世の中に無理を通せるものでもない。

一方、金造さんは徹頭徹尾正体が判らない。一家の主として然るべきところを拝聴したいものだが、なにしろ酒浸りで表に出ないから、家族に情があるのだから無関心なんだかも判然しない。奔放で闊達な氣風があっても悪くはないが、奔放も度を超せば不道德である。表通りの子がみんなで市ちゃんを八分にするというのも納得ができる。つまりは親の放漫が子に撥ね返るのである。市ちゃんも大人になって自我に目覚めた暁には、なんでこんな教育しかなかったと金造さんを恨むかもしれない。

彼らのごとき散漫な塊をもってこれを日本人の家庭一般とするには、あまりにも世間との乖離が激しい。やはり吾々から見ると異端

である。日本に言う世間並とは、自己の欲得でもってむやみに他人の畦道を通行しない慎み深さを、教育の尺度としているはずである。それが美德である。たしかに、なんでも西洋流で押しとおすことを善しとする現今の風潮からすると、もし他人の所有する畦道を通ることが合理的ならば、それを通行できるように交渉することは一種の権利として推奨されるかもしれない。だから慮ることを美德と考えるような人間を古いとせせら笑う。しかし慎みや気配りは、それ自体が利己主義の裏返しである。春秋時代、孔子は己の欲しないことを他人にも施さないことをもって「恕」と言い表した。「恕」は、自己表現の方法が異なるだけであって、西洋文化の基礎の大半を占める基督教の考えと、そう大きな違いはない。

私は自分をごく平均的な人間であると思っており、でき得れば平均的な近隣の関係をもつて安穩と暮らしたい。教育を受けない小児からくそじじいなどと憎まれ口を叩かれたり、一掬の落涙と引き替えに七円二十銭の融資を迫られたりすることは苦痛である。そう考えると、七尺の板塀を越えて小児の戯れに干渉したのは、要らぬお節介である。放っておけば塀の向こうの領分であったのを、詰まらぬことで吾が身と因縁が生ずることになった。

七円二十銭は出そうと思えば苦もなく出せる。おはつさんが市ちやんの尻ぬぐいに金策を余儀なくされるのも、気の毒と言えば気の毒だ。しかし、私のなかに明確な理屈ではないものが通せんぼうをしているようで、得も言われぬ嫌悪の情がこみあげるのを禁じ得ない。紙入れをあける気が起こらない。このまま私が金を都合しなければ、彼ら一家はどうにかなるのかもしれない。どうにかなったところで、それが私の所為ではないことは明らかである。ただ後味が悪い。だからその後味という一点をもって、では金を貸してやろうかと気持ち転ぶことがある。するとその刹那を捕まえて、また嫌悪の感情が頭をもたげてくる。

私の脳裏には一向にまとまりのつかない思案が巡っては消え、消えては巡ってきて、その夜はとうとう鶏の声を聞くまでまんじりと

もしなかった。

七

翌る日、晚餐を食ってから書斎に引き込んで洋燈の下で書き物をしていると、裏の路地で土を踏む音が慌ただしく、しきりと行ったり来たりした。と思うと不意に胴間声をだす者があったり、誰か分からぬ泣き声まで聞こえてきた。また騒動が起きたかと気になっていたら、妻が唐紙をあけて茶を出した。

「全体何の騒ぎだろうね」

私は机上に湯飲みを置いて去ろうとする妻へ、声をかけた。

妻はさあと冷淡に済ました。

「あとでちよっと千代に見にいかせなさい」

「ええ、あとで」

「近寄せちゃいけないよ。遠くから様子を見るだけでいい」

「ええ」

妻は迷惑そうに眉の根を寄せた。

「中毒じゃなければいいが」

梅雨どきはつい隣町で中毒騒ぎがあった。虎列刺（コレラ）ではないかということであった。今時分はもう虎列刺の話は聞かないが、裏の長屋で使っている井戸の衛生がどれほどなものかは知らない。飲む分くらいはきつと水屋から買うのだろうが、ことによって疫病なぞ出られては困る。

とにかくなにかいつもとは空気が違うようだが様子が判らない。裏の板塀は高く造ってあるから覗くこともできない。表からまわって路地を入れてみれば済むようなものだが、わざわざ自分自身がそうすることを好まない。それで書斎に座ったまま落ち着かない心持ちを無理に落ち着けていた。

そうするうちにまた妻が来て、長屋は虎列刺じゃありません、市ちゃんの具合が悪いそうですと云う。

「珍しいな」

「ほんとに」

「ぜんたいどうしたんだろう」

「判りませんけれども、今は床に臥しているそうです」

「おはつさんは」

「付きっきりのようです」

「金造さんはどうしてる」

「頼りになるものですか」

「相変わらず酒かい」

「きつとお酒ですわ」

そこへ千代が帰ってきて、市ちゃんはもう虫の息ですと云う。

驚いて行ってみると、狭い家に近所の連中が何人も押しかけていた。彼らが見守るなかで、市ちゃんは筵（むしろ）のうえに寝かされて、細い声で唸っていた。おはつさんは私の姿を認めると、早口で涙ながらになにかを訴えかけた。気が動転しているようで、なにを云っているのかよく分からなかったが、いろいろな連中の話を総合すると、市ちゃんはどこかの与太者に殴られて、あり合わせの板切れに乗せられたまま、看板屋と下駄屋に運ばれて帰ってきたらしい。なんでも下駄屋の目撃によると、市ちゃんが遊んでいるところへ、与太者が通りかかって因縁をつけて殴りかかったんだと云う。

「子供相手に、しかも三人がかりですぞ先生、ひでえことしやがる」
下駄屋はたいへん興奮していて、まだ胴震いが止まらない様子だ。一方の看板屋は懷手をして至極落ち着いている。

「医者はどうしたんです」

私が大声でそう云うと、

「新道の小林さんは家族で大磯に出かけてまさあ。大通りのほうの医者は、時間が遅いからもう診ねえんだと。ふざけてやがる」と下駄屋が返答した。

「それはいけない」

筋向いの栄さんの家にいる書生が医学の心得があるということを知っていたので、千代を栄さんの家へ呼びにやった。すると栄さん

はさっそく使いをやつて、大川の花火を見にいつてる書生を呼び戻した。書生は今はじまるかと待っていた花火を召し上げられて不機嫌な顔をして帰ってきたが、市ちゃんを診察してこれは酷いと云った。あばら骨が折れているようです、ことによると二三本折れているかもしれません、と云う。

「そんなに悪いのかい」

「ええ、良くはありませんな。しかし生命には影響しておらんようですから、神経をお起こしになるほどではありませんまい」

書生はそう云うと、妙な手つきで搦り鉢にいろいろな粉を振り落としては水を加えて練り上げ、それを応急の湿布として市ちゃんの胸に貼りつけて帰った。

金造さんはさすがに酒を飲んではいなかったが、部屋の隅で他人事のようにうつろな目をしたまま、なにを考えているのか判然しなかった。おはつさんは始終おろおろと、まとまりのつかない声を挙げては神棚を拝むばかりであつた。

「おはつさん、あなたがしつかりしなくちゃいけない」

私は千代に云つて、おはつさんに湯を飲ませた。するとやがておはつさんはずいぶん落ち着き、市ちゃんの命に別状はないと聞いた近隣の者たちも、一人二人と帰っていった。

その後しばらくは、狭い家のなかを諦めに似た静寂が領していた。が、またぶり返すように下駄屋が思い出して鼻を鳴らし始めた。それを受けて、「あの与太者はただ通りかかったんじゃねえ。あれは金貸しの――」と看板屋が一服吸いつけながら低い声で話しはじめた。するとそこに下駄屋がすかさず割って入った。

「待て畜生、おれはすっかり見てたんだぜ。金貸しの満吉の家じゃあ、つい先の大風で土蔵の軒瓦が二枚三枚落ちたきりになってたんだ。そこに雀が巢をつくりやがって雛を育ててたんだが、どうしたもんかここ二三日は親鳥の姿が見えねえ。そうするあいだにも雛鳥はピーチク云いやがるのさ。この小僧っ子は見かねてその親鳥の代わりに、虫を十匹も二十匹もつかまえてくる、米を一掬いも二掬い

も持ってくる。子供のすることだから加減を知らねえ。まあいいや
気心だ、そっと見ておいて、おれがあとでふかした粟やなんかをや
ってたんだ。今日もこの子が天水桶を踏み台にして雛鳥に餌をやる
うとしてた。坊主もう暗いから雛は寝ちまつてるだろうと、おれが
声をかけようとしたときだ。高利貸しの満吉が自分を連れて帰って
きたはいいが、虫の居所が悪かったのか、この糞餓鬼とばかりにこ
の子の襟首をつかんで引きずり下ろした。蔵の庇によじ登ってなか
のものを盗もうって腹だな、ってんで自分に目配せするってえと、
三人で殴ったり蹴り飛ばしたりだ。おれはもう見ちゃいられなかつ
たから、旦那もう勘弁してやっておくんなさい子供のやったことで
すから、と云ってやっと思け出してこの看板屋と二人でここへ運び
込んだって訳よ」

下駄屋は云ってしまうと、顔を背けて土間のへつついを睨んだま
ま、また畜生と吐きだすように云った。

金貸しの満吉とは私が借りている家の家主だ。私と家主の関係は、
家賃を払う月に一度の顔合わせでほんのつまらない世間話をする程
度である。彼が金貸しをしていることも性質に品のないことも、も
とより判ってはいいたが、そんな札付きを従えて商売をしているとは、
今の今まで知らなかった。

知らなかったと云えば、市ちゃんの悪戯の訳を理解しておらなか
った。むろん彼には粗暴な素地があるには違いない。しかしその素
地を勝手に拡大して解釈したのは自分である。おはつさんの腹が読
み取れるの取れないのと、つまらない解釈を加えて妙に歪曲したの
も自分自身である。こうやって見ると、おはつさんは神棚に手を合
わせるだけのただの婦人に他ならない。子を持つ親以上のさもし
い見があるようには到底見えない。たった七円二十銭を惜しむため
に人を悪意に評価するなどは、高等な人間の為すべきことではない。
たしかに金造さんは憂うべき存在に違いない。しかし只今中毒の者
にないを云ってみても無駄である。願うはこの先、おはつさんの努
力をもって金造さんがまっとうな職人に戻ってくれることばかりだ。

私は明日これで市ちゃんを医者へ診せなさいとおはつさんに十円の金を押しつけておいて、下駄を蹴飛ばすようにして外に出た。自分の脳裏に渦を巻いている怒りの半分は、むろん傍若無人な金貸しの満吉に向かっている。

「先生どこへ」と下駄屋の声が追いかける。

「なに、満吉の家に押しかけて談判さ」

それがために店立て（たなだて）を食っても仕方ない。腕の二三本をへし折られたところで一向に困らない。満吉のような悪人を野放しにしておくことのほうがよほど困る。

「おれたちも行きますぜ」

看板屋の声もする。誰でもついて来たければ来るがいい。少し冷えると思ったら、厚い雲のあいだから稲光が差した。きつと土砂降りになるだろう。

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1471r/>

市ちゃん

2011年2月23日22時55分発行